

---

# 東方救仁郷 ~ The lyric poem of remake. ~

れみどれ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

東方救仁郷〜 The lyric poem of rema  
ke. 〴

### 【Nコード】

N5456BA

### 【作者名】

れみどれ

### 【あらすじ】

誰も熱くなり、読んだ皆の心を奮わせる。

そんな小説を読んで、自分は小説を書き始めた。

そしてそんな小説を目指して、書いている。

子供臭くてもいい、青臭くてもいい。

熱い少年漫画のような、心奮える小説・・・なのかな

## 全ては日常から（前書き）

The lyric poem of remake . . . 作り直された叙情詩。

以前、このサイトとは別の場所で書いた小説をリメイクしたいと思います。

東方project（上海アリス幻楽団様）の設定やキャラを元とし、書かれています。

（一部、小説に合わせる形で設定が変わっている事もあります）

叙情的に、中2的にまったり東方小説を書いていきますよ。

二次創作かつ、オリジナル要素が多い小説になっていますので、それらが苦手な人は戻る事をオススメします。

## 全ては日常から

吹き抜ける乾いた風。

それが、私の視界から落ち葉を飛ばしてゆく。

ああ…なんて“いつも通り”なんだろう。

これが…日常。そう、日常。

朝は朝日の眩しさで喘ぐ鳥の声で目覚め…

ご飯を食べ、境内の掃除を一通りし…そして私の生きがい

そう、“賽銭箱のチェック”だ。まあ…今日も空…いや忘れよう。

縁側に座り、風に揺れる木々達を見つめながら茶を啜る。

ああ…なんて“いつも通り”なんだ…『霊夢ー！ー！』

ああ…なんて儂いのだろう、私の日常は。

いつも、あいつか何処ぞのブン屋のせいで私の日常は吹き飛ばされる。

さて？ 今日とはどんなご用なのかしら？ 黒い魔法使いさん？

「何よ魔理沙、白蛇でも見つけたのかしら？」

私の目の前でふわふわと浮いている魔理沙。

ご自慢の箒に跨り、足をバタバタをしている。

かと思いきや、それからいきなり飛び降りた。

「大変なんだぜ霊夢！ どれくらい大変かと言つとそれはそれは…

」

「まじ大変なんだぜ！」

「いいから落ち着きなさい、どうしたの？」

「えーっとな・・・あれなんだよ、マスタースパークが…」

「いつつもはどーんって言って、パーって出るんだけど…」

「ゴメン魔理沙。何言ってるのかまったく分からない」

ため息交じりにそう返すと、魔理沙は肩を落とした。

何をがっかりしてやがるんだこいつ、今ので理解できると思ってるのか。

が、落ちた肩はすぐに上がる。 分かった！ と魔理沙は意気込んでポケットから何かを出した。

出したもの・・・それは

「ちょ…?! 何? いきなり戦ろうっての?」

魔理沙の手にあったもの、それは…

恋符「マスタースパーク」

そう スペルカード。

しかも取り出したカードは、魔理沙の十八番。

マスタースパーク、彼女が使う技の中でも最も強力なものの一つだ。両手で八卦炉を構える魔理沙。 本気…目を見ればそれは分かった。

私も、スペルカードに手をかけ、いつでも発動できるようにする。

だが次の瞬間、私は呆気をとられてしまった。

「そおい！」

魔理沙はなんと、スペルカードを投げ出した。  
風に攫われた。そして魔理沙がそつと呟く。

「恋符……」

「！！！！」

まさか、スペルカードルールを無視……？！

やられる　私の防衛本能がそう察知した瞬間にはもう遅かった

「マスタースパーク！」

『東方救仁郷』 The lyric poem of rema  
ke.』

## 第一話「ここまで日常」

「や……………ん！ お…て……………しゃ……………ん！」

ぼんやりと耳に入る音は聞き覚えのある声。

ああ、朝か……………。

普段は全く気にならないその声がこの時だけは嫌なものに聞こえる。

「零射兄ちゃん、起きて！」

「ん……………ふわああ……………。 おう、今起きる……………」

重い体と目蓋を起こすと、俺を起こしてくれた小さな子が隣に居た。頭を二回ほど撫でて、起こしてくれてありがとうとな。と礼を言う。えへへと笑顔を見せ、ご飯できてるよ！ と俺の手を引っ張る……………。この子は俺の弟のような……………俺と同じ“施設”に入っている子だ

そう、俺は児童擁護施設に入っているのだ。

詳しい経緯は覚えていないが……………とても小さい頃、捨てられていた俺を発見した施設長の計らいで俺はここにいる。

ダンボールに子犬のような扱いで入れられ、路上で放置されていたらしい。

……………よって勿論、両親どころか俺は年すら実際よく分からない。

一応、医者が歯の歯え具合などを見て……………発見当初、俺は3歳とされた。

あれから13年……………俺は便宜上、16歳だ。

そんな俺だが一つだけ分かっている事がある。

それは……………名前だ。ダンボールに雨やら何やらでくしゃくしゃになった紙が一枚あったらしい。

“救仁郷 零射” それが…俺の名前。

子供の頃は分からなかったが、今となっては…随分と変わった名前だと自負している

そもそも、“零”と“射”と言う字が名前で使われているなど見た事なかった。

…まあどうでもいいのだが。

「あーあ。 緑髪の美人でDSなお姉さんいねーかなー？」

「緑髪って実際見たら引かないか？ レディ ガじゃあるまいし」

「お前って夢がないよなあ…」

両親や親戚が一人としていない俺だが…友人はいる。

その中の一人であり、俺が最も信頼している友人…それが憶瀬 恭だった。

恭は、まあ先ほどの発言から分かる通り、変態だ。

そして、DMだ。

だが、根はいい奴だし、人懐っこい。

小学校からの付き合いだが…一番最初に声をかけてくれたのもこいつだっけ…

“あつなつたのなまえーなんてーの？”

“……？ くにこう れいしゃ……”

“……！ 変わった名前だ！あはは！”

「……ふふっ」

「あん？ 何笑ってんの？」

「あ、いやなんでも無い」

「……？」

学校が見えてきた頃だ、だが何かいつもと違う事に気がつく  
全然、登校している人がいないのだ……。  
もしや、と思い俺は腕時計に目をやった。

“ 8時27分”

二本の針が指している場所を見て戦慄した。  
俺の学校の登校時間は8時30分までだった。

「おい！ 恭やべえぞ！ 遅れる！」

「ナツテコツタイパンタコツタイ！ 走るぞ！」

『貴方の夢を叶えましょう……』

「「……………ん？」

俺と恭の声が重なる。

今、聞き知らぬ声が鼓膜を揺らした。

…明らかに恭の声、と言うより男の声ではなかった。

女性の…それも大人。可憐・妖絶と言う意味で大人の女性の声…。  
不思議と冷や汗が出る、俺の本能が叫ぶ。何かおかしいと。

遅刻ぎりぎりとは言え、いつもと違う通学路。静かすぎたコンクリ  
ートの道……………

唾を飲み込む音が響き終わると同時に、俺と恭は後ろを振り返った。

「はい」

「……………?!」

## 第二話「嫌な予感」

「マスタースパーク!!」

.....

「何も……起こらない？」

私は混乱の渦に吞まれていた。えっと……一つずつ状況を整理しよう。

まず魔理沙は……スペルカード（マスタースパーク）を出した。

そして、それを投げ捨てた……まずここで意味が分からない。

次に、何も無い状態で八卦炉を手に、マスタースパークを出そうとしたが……発動しない。

「……こっぴつ事なんだぜ！」

「……えっと、つまりどっぴつ事なのかしら？」

「順を追って話さないダメ？」

「え、それが出来るならそうしてほしいのだけど……」

「分かったんだぜ」

最初からそうしろよ、と呟くと魔理沙は不機嫌そうな顔をした。

まあ、彼女なりに何が起きているのか教えてくれたのだろう、まったく分からなかったが。

魔理沙は今朝の話をし始めた・・・  
なんでも、家に居た魔理沙が外が騒がしい事に気がついたらしい  
ふと、窓から外を見てみると人間が野獣に襲われていた。  
テーブルの上にあった帽子を手に取り、深く被りながら魔理沙は家  
を飛び出した。

「そこまでなんだぜ！」

咄嗟の判断で、魔理沙は手を野獣へ向ける。

人間に自分の攻撃が当たらないように、なるべくコントロールしや  
すい攻撃・・・

魔理沙が選んだのは、

彗星「ブレイジングスター」

マスタースパークを自分の背後に放ち、加速の原動力とする。

そしてそのまま突撃しながら弾幕を放つと言うカード。

今回の場合は、突撃しながら妖獣の方向だけに放つつもりだった..  
のだが。

「...?! おっと、不発なんだぜ?!」

なんと、八卦炉からマスタースパークが出ないのだ。

だが魔理沙は焦る事なく、八卦炉を後ろではなくそのまま妖獣へ向  
ける

「ちょっと危ないが...! 人間! 危ないから伏せるんだぜ!」

人間に襲いかかろうとする妖獣にそのまま普通の弾幕を発射したのだった

今度はしつかりと出た．．．弾が妖獣に当たり、人間の前でバタリと倒れ動かなくなった。

それを見た魔理沙はホッと一息つく。倒した後にムズムズと何か違和感が魔理沙の背中を這う。

「ま…いつか」

「大丈夫か人間」

と、言う事なんだぜ」

ざっと、魔理沙から聞いた話をまとめるとこんな所だった。

なんとも不思議で…解れていた謎、魔理沙の不可解な行動の意味が解けそうだ。

あと少しで全てが繋がる……そんな時だった、また新しい声が境内に響いた

「すいまつせーん！ 霊夢さんいますかー？」

「…石段の方からするわね」

「聞き慣れない声なんだぜ」

顔を見合わせながら、ため息を吐く。

また面倒事…？ いやいや、どうせ何か小さい用事だろう。  
そう自分に思いこませ、縁側から立ち上がる。

「はい？ 何ですかー？」

「あつ、霊夢さんですか？ 自分、憶瀬と言いますー」

「憶瀬？ 聞かない名ですねー。」

短髪でツンツン、もみ上げが無く、耳が丸出し。

くりくりとした目、小さい背丈にほっそりとした肉のつき方  
口はちよっとおちよぼ口・・・？ 小さかった。

総合的に言つとまあ、知らない人だった。

「あつ、はい。 えーと…その自分でもよく分かんないんですけど」

「…え？」

「えーと…とりあえず用があります！ ある人からの頼みで……」

「ある人……つて？」

なんか嫌な予感が 「えーと確か……八雲…紫さん？」

…やっぱり。

落胆、不安、面倒…色んな感情をため息にして私は吐き出した。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5456ba/>

---

東方救仁郷 ~ The lyric poem of remake. ~

2012年1月15日02時49分発行